

学 位 論 文 題 名

ソヴィエト・ロシアの「聖」なる景観：
後期社会主義ロシアの文化状況における正教的遺産の役割

学位論文内容の要旨

本論文は序章、第1章-第5章、終章、付録、文献一覧によって構成されている。全体の分量はA4横書き281頁(400字詰め原稿用紙換算約906枚)、付録は図表、年表、翻訳など計7点である。

後期社会主義時代(1953-1991年)のソ連邦ロシア共和国では、社会主義の国是にもかかわらず、伝統的なロシア正教につながる文化事象が市民権を得ていた。このことは、ソ連崩壊後のロシアで、ロシア正教会が重要な公的役割を演じていることとも関連している。本論はこれを踏まえて、無神論を国是とするソ連社会でロシア正教文化が市民権を保ち得た理由を検討するとともに、とりわけスターリン後の後期社会主義時代に、宗教的文化が肯定的に評価された文化的・政治的なメカニズムを解明し、さらに宗教文化の公的な再評価に対する、市民大衆の役割を跡づけることを目標としている。

後期社会主義社会における正教的遺産の意味・役割を総合的に解明するため、本論では「宗教学」および「科学的無神論」、「映画表象」、「史跡・文化財保護運動」、「博物館」および「ツーリズム」、「宗教の現場」といった人文社会科学の複数の分野にわたるテーマを選び、各章の議論の柱としている。

また本論では、公的な文書資料に残りにくい社会心性に切り込んでいくため、一般的な出版物や大型文書館資料のほかに、地方の文書館や博物館の資料、インタビュー記録、博物館来館者の残した「感想ノート」、映画の監督用シナリオなど、従来の研究がほとんど扱ってこなかった資料に注目している。

後期社会主義のイデオロギーの様態分析のために、本論では権威言説に関するA.ユルチャークの概念を作業概念として援用している。権威言説は、党や政府、集会、新聞雑誌などで用いられる、イデオロギーの正統性を確認するための固定化されたディスクールで、文字通りの意味次元でよりも、いつ・だれが・どこで・どのように用いるのかという行為の次元に重要性がある。人々は権威言説を適切に用いるというルールに従うことによって、イデオロギーとの直接対決をさけ、私的な興味や関心を拡大する可能性を得た。社会主義社会における宗教の展開にも、権威言説の原理が大きく作用した。

第1章では、「宗教」を客観的に検証可能な学術研究の対象として捉えようとしたソ連宗教学・宗教研究と科学的無神論の展開の歴史が検討される。「宗教」が学知の対象となることは、後期社会主義時代に、宗教的文化財に対する関心を広範に発展させた

めに、重要な布石であった。

科学的無神論が発達した後期社会主義時代には、（「反宗教」ではなく）宗教をテーマとした博物館が活発な活動を展開した。一つの事例が「宗教・無神論史博物館」で、ここでは宗教への批判のみならず、その発展の歴史が紹介された。また、学芸員たちは地方の宗教的実践について、現在の宗教社会学が行うような調査を行うことができた。もう一つの事例が「ルブリョフ名称ロシア中世芸術美術館」で、ここでは宗教画であるイコンやフレスコ画を美学的見地から評価するという主張のもとに、ロシア正教の世界観の追求が可能になった。

第2章では、1960年代以降のロシア文化において、アンドレイ・ルブリョフという中世のイコン画家が持った意義を、A.タルコフスキーの映画『アンドレイ・ルブリョフ』を主な題材として論じている。ルブリョフは単なる宗教画家としてではなく、民衆の悲しみ、喜び、祈り、希望を調和的な美しさの中に描き得た偉大な民衆芸術家として、1960年代のロシアに市民権を得た。これを題材にしたタルコフスキーの映画の評価は、ロシア・ナショナリズムの問題とも関連して、はっきりと二分されたが、そこにはまた制作者タルコフスキー自身の思想上の変化も反映されていた。論文は本来マルクス・レーニン主義的イデオロギーを内面化していた人間タルコフスキーが、創作の過程でそこから離脱していく様を、「真実の探求」をキーワードとして跡づけている。

第3章では、宗教的な文化財を民族の文化遺産として肯定的にとらえ直すことに貢献した、「情熱家」と呼ぶべき建築家、修復士、芸術史家、歴史家など専門家の働きがたどられる。また、後期社会主義時代に入って、こうした文化遺産が「史跡・文化財」として国家レベルで保護の対象とされていく過程が「全露史跡・文化財保護協会（VOOPIK）」の活動を主要な事例として検討されている。同協会の成立過程の詳細な分析によって、この組織が知識人の意見を吸収・反映する「市民社会」的機関に似た役割を担っていたことが明らかにされている。従来のイデオロギー的価値体系から外れる宗教的「史跡・文化財」が、「ナロードの才」や「父祖の伝統」と呼び代えられて市民権を得、史跡・文化財に対する肯定的な評価が規範化する過程が明らかにされている。

第4章では、「史跡・文化財保護運動」が重視した「ロシアらしさ」の「貯蔵庫」として北ロシアの3つの地域（キジー、ソロフキ、ヴァラーム）を取り上げ、そのソ連後期における運命を具体的に検討している。これらの地域はすべて革命前に聖地と謳われた修道院や教会が存在し、後期社会主義時代に観光地化した。ただし、それぞれの場所に設立された博物館活動や学芸員の性格は極めて異なるものであり、そのことがポスト・ソ連の現在にも影響している。史跡・文化財保護の現場とそれを語る言説がいかに作り上げられていくのかという問題が、場の歴史的特性、現地の「情熱家」や文化財保護団体、博物館の活動から明らかになっている。またこの現象の社会における受容の問題が、博物館を訪れるツーリストの立場から明らかにされている。

第5章では、ウラジーミル州を具体例として、史跡・文化財保護運動と博物館、教会・

教区信者との関りが検討されている。ウラジーミルはロシア国家の歴史的故地とみなされ、政府主導で観光地化がすすめられた。そのため、正教的遺産を文化財として保護する動きが自発的には生じにくく、むしろ教会建造物を博物館利用することに対する教区信徒の反発が観察された。農村部では、教会組織の与り知らぬところで「聖地」が創られたり、レーニン像とイコンが同一視されたりするなど、自然発生的な宗教的実践が行われ、こうした行為は、当局の弾圧の対象であり続けた。この事例から、後期社会主義時代のロシア正教が、公権力によって統制可能な部分（民衆の伝統文化、高位聖職者と登録された教会）と、そうでない部分（反体制派、「狂信者」、セクト）の二極に分かれていたことが明らかになった。

以上のように本論文は、様々な資料を用いることによって知識人からツーリストに至る広範な人々の心性に迫り、ソ連型社会における信条の自由の実現という一般問題に光を当てている。また政治的ナショナリズムや愛国主義を離れて、学術的な関心から文化遺産に向かう「情熱家」の存在に焦点を当て、ソ連の宗教文化論に新しい展開を加えたところにも、本論文の新しさがある。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 望 月 哲 男
副 査 教 授 松 里 公 孝
教 授 望 月 恒 子

学 位 論 文 題 名

ソヴィエト・ロシアの「聖」なる景観： 後期社会主義ロシアの文化状況における正教的遺産の役割

本審査委員会は、5回にわたる審議と口頭試問等を通じて、以下の点を確認した。

本論文はスターリン死後の後期社会主義ソ連社会における、伝統宗教としてのロシア正教文化の特異なあり方を、社会史、文化史、宗教史の諸観点から多面的に論じたものである。ソ連の国家イデオロギーは、宗教を過去の遺物として否定していたが、一方で社会の内には宗教的習慣や儀礼が根強く残り、国家の側も国民統合の手段として教会や宗教的シンボルを利用していた。また、宗教に対抗する科学的無神論研究や無神論博物館などの活動は、学問的宗教研究そのものに道を開く契機としても作用した。教会建築や宗教美術を「民衆の世界観の表象」といった、公式イデオロギーに抵触しない言葉で捉えなおす「権威言説」使用も、宗教的事象に市民権を与える方便となった。1960年代には愛国主義と結びついた文化遺産保護運動の高まりやツーリズムの流行の結果、修道院や宗教的聖地が博物館・自然公園といった形で整備・保護される流れが生まれた。

申請者の論文はA. ユルチャークの「権威言説」論を一部修正したうえで援用しながら、ソ連時代後期の社会における複雑で多面的な宗教文化のあり方を、以下の5つの観点から論じている。

- 1) ソ連宗教学の特徴と、宗教・無神論史博物館などによる反宗教宣伝の経緯
- 2) 宗教的テーマの芸術的展開例としての映画『アンドレイ・ルブリョーフ』分析
- 3) ブレジネフ期の史蹟・文化愛保護運動と宗教の復権
- 4) 北ロシアの聖地における文化財保護運動と宗教施設の自然公園・博物館化の経緯
- 5) ウラジーミル州における観光地化と教会の博物館化。

審査委員会は、課題設定、論点選択、議論の方法、資料選択、結論の各点において、申請者の論述の妥当性を検討し、後期ソ連社会文化論としての当該論文の価値を判断した結果、以下のような評価を下した。

第一に、ソ連社会文化論の紋切り型を打ち破ろうとする申請者の議論枠組みが評価に値する。従来、公式文化と非公式文化、建て前と本音、体制と反体制といった二元論に還元されがちだったソ連型社会論に、申請者はイデオロギー表象を文字通りの意味と遂行的意味に弁別する権威言説論を応用し、思想文化論に幅を与えている。これによって宗教という非体制的要素が伝統文化と名を変えて科学的無神論と共存する仕組みが解明されている。

第二に、申請者の宗教論の手法自体に、学問的な新しさが見られる。申請者は従来の宗教論にみられる教会、教義、正統と異端、信者集団、国家権力といった要素とは違うアクターを介して、宗教をより広い枠で論じている。博物館の宗教展示、映画、史跡文化財保護団体、聖地の自然公園化、ツーリズムとのかかわりといった多角的なテーマ設定は、世俗型社会における宗教の様態の研究にとって新鮮かつ有効である。

第三に、時代状況を多元的に再現する手続きにおいても、本論は非凡である。博物館、社会団体、映画など、多くの領域にわたるアーカイブ資料を駆使していること、さらに公式資料に残りにくい社会心性に触れるため、学芸員等からの聞き書き、訪問者の感想ノートなど、多様な資料を使用してリアリティへの接近を心がけていることは、高く評価されるべきである。

以上のような立論上の工夫の結果、本論文はソ連後期におけるロシア正教文化の多様な存在形態とその要因を解説することに成功しており、ひいては社会主義型社会における開かれた親密圏の形成、そして個人の信教の自由の実現という、普遍的問題をめぐる議論にもなりえている。総じて、ソ連崩壊後のイデオロギー状況の変化とロシア正教の復興によって、客観的な理解が難しくなったソ連後期の宗教事情という近過去に対して、申請者が示した総合的な取り組みの工夫はきわめて有効なもので、そこから得られた市民の目線に映る宗教像の分析は、高い評価に値すると思われる。

もちろん本論にも若干の問題点はある。ロシア正教を中心に据えた結果として、多民族国家における宗教問題の一般的な側面が多少見えにくくなっている。また宗教が市民的視線でとらえられているという長所の半面、国家の宗教政策の流れについては幾分説明が乏しい。ただしそれらは瑕疵に過ぎず、論文全体の価値を損なうものではない。

以上に基づき本審査委員会は、本論文に示された申請者の研究の成果を高く評価し、全員一致で本論文を博士（学術）の学位を授与されるにふさわしいものであるとの結論に達した。